

100年後のいまも、これからも

三池海と港の物語

監督:熊谷博子

撮影:大津幸四郎、中島広城 音声:奥井義哉 編集:大橋富代 ナレーター:中里雅子

写真・資料協力:ヨロン島観光協会、口之津歴史民俗資料館

協力:三池港物流株式会社、大牟田・荒尾地区与論会 企画協力:大牟田市石炭産業科学館

製作:大牟田市、一般社団法人 大牟田観光協会 助成:日本財団

上映時間 25分

大牟田市石炭産業科学館にて上映中

福岡県大牟田市岬町6-23 TEL 0944-53-2377 毎月最終月曜日休館
<http://www.sekitan-omuta.jp>

海と港の新たな物語が はじまろうとしている。



三池は干満差が大きく干潟の広がる有明海に面し、人は海とかわりながら暮らしてきた。

明治になると産業革命の波が日本にも及び、近代化された三池炭鉱から石炭が海外へ輸出されるようになった。しかし有明海には大型船が来ることができず、小さな舢舨(はしけ)で口之津や三角まで石炭を運び、大型船に積みかえるという手間がかかっていた。そこで明治41(1908)年、三池炭鉱を経営していた三井は、干満差を解消する開閉式の「閘門」を備えた三池港を築港し、大型船が入港できる石炭積出港として開港。三池炭鉱発展の礎とした。

口之津から、そして三池へ。そこには昼夜を問わない石炭の船積みという厳しい労働に携わる与論の人々がいた…。

三池炭鉱は平成9(1997)年閉山したが、三池港は今も地域の産業の拠点として稼働し、人々の生活を支えている。そして2015年、100年前の石炭産業を担うシステムがよく残る三池の関連資産は「明治日本の産業革命遺産」の構成要素として、世界遺産となった。



初めて三池港を撮影したのは、2001年のこと。ほぼ100年前から変わらずに動いている姿に圧倒されました。有明海には、夕陽が沈む中を小舟が行く、美しい光景がありました。そこで人間がどう生きてきたのか、いつか描くことができれば、と思っていました。三池港は世界文化遺産になりましたが、この作品で、未来へ向けてのメッセージを受けとっていただけたらうれしいです。

プロフィール

熊谷博子(くまがいひろこ) 映像ジャーナリスト

1951年、東京生まれ。テレビ番組制作会社で、戦争などをテーマに多くのドキュメンタリーを作り、フリーに。映画『三池 終わらない炭鉱の物語』(2005)で日本ジャーナリスト会議特別賞、『三池を抱きしめる女たち』(2013 NHK)で放送文化基金賞受賞。その後、『原爆にさわる 被爆をつなぐ』(NHK)など。現在、映画『作兵衛さんと日本を掘る』を制作中。



監督
熊谷博子